

楽曲解説

【解説】 榎崎洋子 / 野本由紀夫

1/22(日) 第888回オーチャード定期演奏会

1/27(金) 第889回サントリー定期シリーズ

武満 徹 (1930-1996)

セレモニアル—An Autumn Ode— 笙とオーケストラのための (約8分)

日本伝統音楽の楽器を使った武満徹 (1930-1996) の作品は、秋と結びついた作品が多い。たとえば、琵琶、尺八とオーケストラのための『ノヴェンバー・ステップス』(1967)、同編成のための『秋』(1973)、雅楽のための『秋庭歌』(1973)、「秋に寄せる頌歌」の副題をもつ、笙とオーケストラのための『セレモニアル』(1992)などの作品である。冬に移ろいゆく「あいだ」としての秋に、表現の対象を見出す点が武満らしいと言いたくなる。その一方で、邦楽器とオーケストラが示唆する、日本と西洋の「あいだ」としての文化の表現もそこには重ねられているだろう。『ノヴェンバー・ステップス』を作曲していた頃の武満は、「邦楽器とオーケストラそれぞれの文化の異質さを際立たせたい」と語っていたが、その後は、東も西もない海を泳ぎたい旨も述べている。

琵琶と尺八に、オーケストラが緊張感

をもって機敏に変化し対応する『ノヴェンバー・ステップス』と、笙とオーケストラが互換的で連続的な関係に置かれたと言いたくなる『セレモニアル』を比べると、邦楽器を使った武満作品は大きく変遷してきたと言いたくなる。しかし、その都度用いられる邦楽器の特徴を克明にとらえて、それをオーケストラに映し出すアプローチは変わっておらず、変わったと感じるのは、用いられる邦楽器間での楽器の個性の違いに起因するものだろう。

『セレモニアル』(1992)は、武満によれば「笙による序奏と後奏をもつ、オーケストラのための小典礼楽である。私の雅楽曲『秋庭歌』の旋律が素材の一部として用いられている」という。『秋庭歌』の冒頭、龍笛で奏される短2度と短3度を組み合わせたモチーフ(ミ-ファ#-ソ、レ-ド#-ソ)を、『セレモニアル』ではまず笙が個々の音をゆるやかに伸ばし

つつ重ねていく。次に登場するオーケストラの木管楽器と弦楽器は、最初、雅楽の楽器を彷彿させるが、他の楽器が加わっていくと、武満のオーケストラの響きが次第に開かれていく。楽器が増えても劇的に高まることなく、個々の楽器は各自の音をゆったりと伸ばすように進行する。『ノヴェンバー・ステップス』が冬に

近づきつつある秋とすれば、『セレモニアル』は、あいだにある季節そのものとしての秋を表していると思われる。

(以上、榎崎)

【楽器編成】 フルート3(1~3番ピッコロ持ち替え)、オーボエ3、クラリネット3、バス・クラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、打楽器(ヴィブラフォン、グロッケンシュピール、アンティークシンバル)、ハープ、チェレスタ、弦楽5部、独奏笙

ブルックナー (1824-1896)

交響曲第9番 二短調 作品109 (ノヴァーク版)

- I. 厳かに、神秘的に (約25分)
- II. スケルツォ、動きをもって、生き生きと - 急速に (約11分)
- III. アダージョ、ゆっくりと、厳かに (約27分)

交響曲第9番は、ブルックナー (1824-1896) の最後の交響曲である。第4楽章を完成させる前に作曲者が亡くなってしまったため、未完のまま残された。

ブルックナーは、第8番をいったん1887年8月10日に完成させると、1か月後の9月21日から第9番の作曲に取り掛かった。ところが、彼が「芸術上の父」と呼んでいた指揮者のレーヴィから第8番に対する思わぬ否定的な意見が届き、ショックのあまり第9番の作曲を中断。第8番の改訂に取り組むことになる。

ここから悪癖の改訂期がはじまってしまふ。改訂は第8番だけに終わらず、強迫観念に駆られたかのように第1、3、4

番と次々手を加えていった。残された時間との勝負だった時期に、とりわけ初期の第1番の改訂に時間を費やしてしまったことが、第9番が未完に終わった大きな原因だといわれる。

結局、第9の作曲にもどったのは1891年になってから。実質的には、1892年12月18日に第8番の初演が大成功に終わった後である。70歳を迎えた直後の1894年11月30日、第3楽章までを完成させたが、そのときにはすでに第9番が未完になるかもしれないと薄々感じていたようだ。

彼はその頃、ウィーン大学における講義のなかで、もし自分がこの交響曲の完成前に死ぬようなことがあったら、自作の『テ・デウム』を終楽章として演奏してほしい、と述べている。

ブルックナーの体力は、もう残りわずかだった。1896年10月11日15:00過ぎ、とうとうその時はやって来た。その

楽曲解説

1/26(木) 第106回東京オペラシティ定期シリーズ

1/26

3・4時間前まで、ブルックナーは終楽章の作曲を続けていた。自筆譜は、終結部の直前、第3主題の再現まで書き進められていた。さぞ無念だっただろう。

大量のスケッチが残されていたはずだが、ブルックナーの死後、金の亡者たちが奪っていったため、散逸してしまった。

いくつかの補完の試みはあるものの、本日は**ノヴァーク版による第3楽章までを演奏**とする。

第1楽章 厳かに、神秘的に いわゆる「**ブルックナー開始**」により虚無的に主題メロディが紡ぎ出される。瞑想的に始まった音楽は、壮大で圧倒的な頂点に達する。シェーンベルク(1874-1951)の表現主義的先取りするかのような、**無調の瞬間**さえある。

大胆な不協和音の後、ワーグナー風の葬送コラールがたち現れる。終結部には第7番の第1楽章からの引用もあるが、まるで「**破局**」を迎えるかのようだ。ブルックナーの**生への執着**かもしれない。

第2楽章 スケルツォ、動きをもって、生き生きと一急速に 最初の響きは、ワーグナーの『**トリスタンとイゾルデ**』の**冒頭和音**にもとづく。突然、暴力的な全奏(トゥッティ)になったり、荒々しいリズム

ムが刻印されたりしている。

第3楽章 アダージョ、ゆっくりと、厳かに いきなり強音のヴァイオリンで嘆くような上昇主題が奏されると、激しく感情を揺さぶっていく。いったん静まると、ワグナーチューバによる荘厳なコラールとなる。ブルックナーはこれを「**生との決別**」と呼んでいた。

展開部で不協和音は最強音でクライマックスを迎える(音階のすべての音が同時に鳴り響く、属13和音)。死に臨んだ、人間の懊悩^{おのの}であろうか。

終結部になると、まるで浄化されるかのように、ホ長調へと収まってゆき、至福の世界に達する。第8番の第3楽章の**アダージョ**主題や、第7番の**冒頭主題**がワグナーチューバで静かに回想されると、祈るようにして曲は閉じられる。

ブルックナーは、この交響曲の献辞として「**愛する神に捧げるDem lieben Gott**」と書き記した。彼は天国で、この交響曲を完成させることができたのだろうか。

(以上、野本)

[楽器編成] フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン8(5~8番はワグナーチューバ持ち替え)、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

ワーグナー(1813-1883)

歌劇『**タンホイザー**』序曲(ドレスデン版) WWV70 (約14分)

リヒャルト・ワーグナー(1813-1883)は、いうまでもなくドイツが生んだ舞台音楽作品の巨匠である。はじめはロマン的なオペラの伝統にのっとりてグランド・オペラを生み出していったが、19世紀後半ばをすぎたころから、その伝統を破って、音楽、劇、文学、美術等を融合した**総合芸術**としての「**楽劇 Musikdrama**」を創始することになる。したがって、台本はすべてワーグナー自身が書いたものである。

本日の1曲目は、ワーグナーがドレスデン宮廷歌劇場の指揮者だった1845年10月(32歳)に完成した、3幕からなる大ロマン的オペラ『**タンホイザーとヴァルトブルク城の歌合戦**』の序曲。オペラとしての初演は同年10月19日だが、現在演奏される序曲は、初演後から1851年9月にかけての改訂期に手直しされた版、いわゆる「**ドレスデン版**」である。

物語は、中世の騎士で恋愛歌人のタンホイザーを主人公とする。彼は女神ヴェーヌスと愛欲にふけている。ヴァルトブルク城でひんしゆくを買った歌合戦のあと、エリーザベト姫のとりなしでローマへ巡礼の旅に出るが、教皇はタンホイザーの懺悔(ごんげ)を聞き届けず、赦免されなかった。彼は自暴自棄となるが、エリーザベトの自己犠牲によって、魂が救済される。

序曲は、ホルンとクラリネットによる巡礼の音楽(恩寵による救済のテーマ音楽)に始まり、中間部分の喧噪に満ちた音楽がバッカナール(饗宴)のモチーフ。高揚した部分はヴェーヌス(愛の女神)賛歌である。最後はふたたび救済の音楽となって、クライマックスを築く。

[楽器編成] フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、打楽器(トライアングル、小太鼓、シンバル)、ティンパニ、弦楽5部

ならざき・ようこ/東京芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。博士(音楽学)。愛知県立芸術大学教授を経て現在武蔵野音楽大学教授。編著書に『武満徹と三善晃の作曲様式——無調性と音群作法をめぐって』(音楽之友社、京都音楽賞研究評論部門賞)、『人と作品 武満徹』(音楽之友社)、『日本の管弦楽作品表 1912-1992』(日本交響楽振興財団)など。『毎日新聞』に音楽会批評執筆。

のもと・ゆきお(指揮・音楽学)/桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部芸術教育学科教授。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」の元監修・解説者、同Eテレ学校番組「おんがくプラボー」番組委員、同「ららら♪クラシック」や「題名のない音楽会」ほかに出演。昨年10月には、没後50年の世界的チェリスト、ガスパール・カサドの交響的チェロ協奏曲の日本初演のタクトを取った(世界初演の可能性もあり)。